

# 農村計画学会誌「特集論文」「特集論考」「活動報告」等の公募について

編集委員会

農村計画学会誌は、36巻2号（2017年9月発刊）から数号の間、以下に示すテーマによる特集を組むことを予定しています。

その原稿を公募いたしますので、奮ってご応募くださいますよう、お願いいたします。

## 1. 特集テーマ（順不同）

- |  |
|--|
| (1) 農村協働力<br>(2) 農村計画の国際展開<br>(3) 農業農村のソフトな防災・減災 |
|--|

なお、それぞれの詳細については、次頁<特集テーマの詳細>をご参照ください。

## 2. 原稿の区分

特集テーマのいずれかに適合する内容に関する「論文（査読付き）」「報告（査読付き）」「論考」、および「活動報告」とします。

前三者については、本学会の投稿規程を参照ください。

「活動報告」は、創意工夫あふれる現地での実践を中心に、広く現場の声を募集します。

## 3. 応募から掲載までの流れ

### (1) 応募方法

- 論考、活動報告については、以下を2017年1月末までに提出ください。
  - a. 要旨（A4用紙1枚程度、形式自由）
  - b. 規定の投稿票（農村計画学会ホームページに掲載）
    - ①希望する特集および希望する原稿区分（論考、活動報告）、②題名（仮題で結構です）、③著者名、④連絡先
- 論文（査読付き）、報告（査読付き）については、投稿規程に則って作成された完成稿を、希望する特集テーマを明記の上で、2017年1月末までに提出ください。

→ 提出先：いずれの場合も、[arp\\_editors&ruralplanning.jp](mailto:arp_editors&ruralplanning.jp) にE-mailで提出ください（&を@に変えて送付ください）。

なお、いずれについても、提出〆切り日を再設定する場合がありますので、あらかじめご了承ください。

### (2) 選考と原稿の提出、掲載まで

論考、活動報告については、①特集の趣旨に適合するか、②学会誌の水準と照らし合わせて適当と認められるか、③学会誌1号あたりのページ数を大幅に超過しないか、④その他、を基準に選考し、結果は2017年2月末までに著者に連絡します。掲載可と判断された著者には、テーマごとに期日を設定しますので、それまでに原稿を作成し、提出いただきます（期日を超過した場合には、掲載を見送らせていただく場合があります）。

論文（査読付き）、報告（査読付き）については、通常の論文（査読付き）などと同様に、査読のプロセスを経て、掲載の可否を決定します。（査読の終了が当該特集号の発刊に間に合わない場合には、次号以降への掲載となりますことをご了承ください）。

## 4. お問い合わせ

ご不明な点などは、[arp\\_editors&ruralplanning.jp](mailto:arp_editors&ruralplanning.jp) にE-mailでお問い合わせください（&を@に変えて送付ください）。

## <特集テーマの詳細>

### 1. 農村協働力

農山漁村の地域社会は、もともと第1次産業を生業としながら、その同質性と持続性を担保してきたが、高度経済成長期以降、地方から都市への人口移動の結果生じた過疎化のみならず、世帯員が農業のみならず他産業に従事する兼業化や、都市近郊ではサラリーマン世帯の転入を伴った混住化などを伴って、大きく変化している。

その中で、農山漁村を対象とした地域政策では、地域内の内発性を喚起すべく、様々な事業が打ち出されてきた。例えば、2000年には中山間地域等直接支払制度が設けられ、いわば集落活性化に向けた支援金を伴って、共同取組活動を通じた耕作放棄の防止が目指された。しかしながら、2015年度から始まった制度の4期対策では、取り組み面積が4.8%と大幅に減少し、集落の小規模化・高齢化が著しく進む中で、もはや集落構成員のみでは現状維持も厳しい実態も垣間見られている。

このように厳しい状況に直面する地域が生じる一方で、次代に向けた意欲的な取り組みを見せる地域も存在する。そこには、単なる地域内外での「交流」に留まらず、都会や他の地域にも広がったネットワークを活かして、より実践的な担い手を得ながら、地域再生を目指す開放的な志向が感じ取れよう。

そこで本特集では、「農村協働力」というキーワードを掲げながら、農山漁村が直面する今日的な課題に対して、どのような顔ぶれで立ち向かい、また、それを乗り越えようとする機運を作り、知恵を寄せるプロセスをたどっているのか、現場の実態と今後の展望を描き出してみたい。

### <期待する論考・活動報告のテーマ例>

- 若者たちのローカル・ネットワークづくり、なりわいづくり
- 農山漁村のマネジメント主体としての「地域運営組織」の可能性
- 都市と農山漁村をつなぐ「ソーシャル・イノベーター」

### 2. 農村計画の国際展開

地球環境問題に対する巨視的な枠組みとして持続可能な地球社会の実現をめざす「Future Earth」が国際的な研究プラットフォームとして整備され、近年、国際プログラムの再編、整理がなされた。2016年4月には日本学術会議が「持続可能な地球社会の実現をめざして—Future Earth（フューチャー・アース）の推進—」とした提言を公表し、我が国はこの枠組みに沿った形で環境問題に対する研究に力を入れ、かつ国際的に貢献していくことが必要になったと考えることができる。ここでは、Future Earthが掲げるフォーカルチャレンジに沿って「ステークホルダーの特定や協働企画の手法、共同研究の実施方法や研究成果の発信と社会での実装等も含めた超学際研究を進める」と具体的内容が示されているが、「実践的な科学」の特徴を有する農村計画学の分野では、実はこれは特に新しい概念ではなく、ステークホルダーとの協働を通じた問題解決と社会実装という研究活動は、長らく多くの研究者が試みてきたものである。ともあれ、農村計画の分野においてこうした命題に対する取り組みが外部に上手に発信されてこなかった側面も否めず、「新しい概念」として世界的に提示された事実を目を向けなければならない。したがって農村計画学がこれまで行ってきた活動や今後の活動のより戦略的な外部発信と研究成果の整理がなされるべきであり、かつ新たに国際的な流れを見据えた研究活動にも力を入れていかなければならない。また、近年、文部科学省が国内の大学においてアジアを中心とした優秀な留学生を獲得する方針を示す中で、農村計画学もこうした世界の潮流に目を向けつつ、留学生が研究対象とする諸外国の事例研究等を広く受け入れ、積極的な国際展開を図らねばならない時期に来ている。

本特集では、農村計画の国際展開を見据えた、海外での事例研究、上記フューチャーアースなどの国際的な枠組みに沿った事例研究など、横断的な視点から整理・議論頂き、今後、目指すべき「農村計画の国際展開」のあり方について考えたい。是非とも、多角的な分野からの多様な応募を期待します。

### <期待する論考・活動報告のテーマ例>

- 解決策の社会実装を目指した海外における事例研究
- 海外と国内の農村計画学的研究の比較

### 3. 農業農村のソフトな防災・減災

地震と津波が甚大な被害をもたらした東日本大震災から5年が経ちましたが、わが国はその後も極端気象による水士砂災害などの大規模自然災害に見舞われてきました。地震リスクや気候変動による影響は今後ますます増大することが懸念されており、平成25年12月11日には「強くしなやかな国民生活の実現を図るための防災・減災等に資する国土強靱化基本法」が公布・施行されました。これを受けて農業農村整備事業においては、基幹的農業水利施設の老朽化や耐震化の対策や農村地域の湛水被害等の防止対策といった、ハード整備による予防的な取組が本格的な実行段階に入っています。しかしながら近年の災害は強大化、広域化、長期化するものが多く、その規模が想定を超えた場合には、適切な情報伝達や避難行動といったソフト整備こそが被害を最小限に抑えるための課題となります。

国土強靱化基本法の第二条第2項では、法の基本理念として「地域間の交流及び連携を促進し、固有の文化及び自然条件等の特性を生かした地域の振興を図り、地域社会の活性化及び地域における定住を促進することにより、経済の停滞、少子高齢化の進展、人口の減少等の我が国が直面する課題の解決に資するとともに、国土の保全及び複数の国土軸の形成を通じた国土の均衡ある発展を図られること」が掲げられています。これは、農村地域において農村計画学が担うべき役割とも共通します。過去の大規模災害を通して蓄積されてきた知見を整理すると同時に、新たな防災・減災のソフトを構築していくことが、農村計画学に対して農業農村の枠を超えて広く社会から要請されているといってもよいでしょう。

本特集では、災害への予防的な対策や災害発生後に必要と考えられる対策について、農村計画学が対象としてきたフィールドにおける過去の事例などを踏まえて、多角的な視点から整理・議論頂き、これからの「農業農村のソフトな防災・減災」に向けての足がかりとしたい。

#### <期待する論考・活動報告のテーマ例>

- 災害避難行動の心理分析
- 災害発生時の物資供給の事例分析
- 集落特性が農地災害復旧に及ぼす影響
- 農村協働力を活用した防災活動
- 避難所等のコミュニティ形成に係る諸課題

※ すべての特集テーマにおいて、例として示した項目以外でも、特集の趣旨に沿う内容を広く募集します。